津守常弘先生インタビュー・メモ

2012/7/15,16（於駒澤大学）　石川純治

キー：公開（規制）と計算、理論と制度、自己相対化とメタ理論、会計学の主体性、歴史と構造と弁証法

１）公開と計算：『会計基準形成の論理』で果たせなかった課題の１つ

『会計基準形成の論理』（森山書店、2002 年）では、同書で果たせなかった課題の１つとして「計算」と「公開」との関係が挙げられているが（397 頁）、これまでの議論から示唆されるように、筆者が特に注目するのは「『公開』に逃避するのではなく『計算』に即して、問題の解決に努めるべきである」（397 頁、傍点引用者）という点である。津守教授の次作の注目点がそこにある（その全体的位置は端的には 387 頁の表１から読み取れる）。なお、同書を貫く重要な概念は「公開」（publicity）であるが、とりわけその国家による社会的統制手段という視点（マクロ会計政策的視点）からの考察は第１篇で展開されている。（拙稿「企業会計の変容をどう見る」34 頁注７より）

Ｑ１：「逃避」と言うには、大変な研究エネルギーが費やされておられる。仮に、文字通り「逃避」と受けとめれば、本丸は「『計算』に即して、問題の解決に努めるべきである」の「計算」ということになる。そこで、計算とりわけ「制度の中に浮かんでいる」計算の構造とは

参考：「会計計算」(Accounting)と「公開」(Disclosure)の区別（同書 p.373）；海鳥社 1990 年での計算構造論（商品系列と貨幣系列）、Ｂ／Ｓに新たな「商品系列」項目の混入、Ｂ／Ｓの半ば損益計算書化（同書 p.396、271-72）⇒この全面展開と「浮かんでいる」形を見たい。

２）固有の会計理論と制度化された会計理論：制度性と固有性

Ｑ２：Ｑ１とも関連して、制度化に対する固有性とは（制度性と固有性）

論考での「簿記・会計固有の理論」の多用（「会計史研究の現代的意味」、「企業会計」など）

理論（論理）的構造と制度（現実）的構造→典型的な見方図：同書 p.270 の図２

３）387 頁の表１、ジャンクション、複合体→3 ファクターの析出：モデル構築

Ｑ３：「擬制資本－公開－規制」のモデルと「計算」のつながりについて：4 次元モデル

著書：①ｘ軸＝現実資本→擬制資本（経済）、②ｙ軸＝秘密→公開（会計）、同書 p.387

＋③z 軸＝規制（政策：特にマクロ会計公開政策）が重要：第 3 のファクター（「企業会計」論考）

津守理論からの私の見方：擬制資本の拡大・肥大化→規制→公開→計算（擬制資本＋現実資本）

４）自己を相対化することのできる構造を具えた会計理論：自己解剖のあり方、「メタ理論」

Ｑ４：会計学の主体性について、特に規制・公開の会計学との関連で、メタ理論の意味あい

特に１）の後半：「『公開』に逃避するのではなく『計算』に即して、問題の解決に努めるべきである。その場合、会計学の主体性・学としての批判性の堅持、ひいては自己を相対化することのできる構造を具えた会計理論（「メタ理論」を内蔵した会計理論）の構築が不可欠であろう」（397 頁、傍点引用者）⇒ここが１）とともに極めて重要な箇所。

→自己解剖（思索の旅）：「筆者自身の研究史の自己分析・点検を通じて…」（「会計史研究の現代的意味」冒頭ページ）

５）史的発展の構造分析と弁証法、そして計算の構造分析：２つの異なるモデルと接合

Ｑ５：歴史と構造と弁証法について、そのなかでの１）と２）の計算構造の位置について
　歴史分析と矛盾構造：史的発展のモデル（公開・規制の動態分析→弁証法の思考はどこ？）と、そこに記録計算の構造（モデル）がどう組み込まれるか、その全構造を見たい／ＦＡＳＢ概念枠組み（制度）と利益計算構造（理論）はどうかかわる（最終講義レジュメの第四段階より）

「計算」と「制度」の両面にかかわる会計アカデミズムの危惧と警鐘

「企業会計」論考の最終パラ（p. 29）での警鐘と後進へのメッセージの含意
「会計史研究の現代的意味」p. 29 の第 4 の問題点（研究・教育の有り様への影響）

６）「Hicks 的利益定義」への純化、資産負債中心観の「差額説」：「計算」との関係で

Ｑ６：伝統的な意味での計算構造論、とりわけ日本のそれとは異質なもの。となると、結局は制度性を帯びた、制度的装置としての計算でしかなく、簿記・会計の固有の理論の埒外（経済学 or 財務論）とならないか

「企業会計」論考 p. 27, 29：簿記構造の埒外
→会計的計算構造とは異質なもの→最終講義レジュメ（第 4 段階）でのドイツ・日本の構造分析に適用の問題

７）「会計的権力機構」の確立（著書 p. 392）：「制度」との関連で

Ｑ７：会計規制と「会計的権力機構」（著書 p. 392）のなかでのアカデミズムの位置（従属性、脆弱性、アカデミズム自体の権力構造と新聞・雑誌・出版メディア）
　→「企業会計」論考の最終パラ（p. 29）での警鐘と後進へのメッセージの含意

　→◎「会計史研究の現代的意味」p. 29 の第 4 の問題点（研究・教育の有り様への影響：研究方法のＩＳＯ化）：会計研究誌の投稿（査読）基準とＩＳＯ（均質・均等）、関連して日本の「財務会計研究の棚卸し」（2010 年 9 月）の背景は

８）その他

Ｑ８：**貸借対照表の「含蓄性」と「多様性」**：この九大最終講義での意味するもの、その現代的意味、たいへん興味深い視点
　→拙著『複式簿記のサイエンス』p. 99 注 12 との関連、何が本源的で何が派生的な F/S か

Ｑ９：**3 人の先生（北川、宮上、岡部先生）**：継承性（連続性）と独自性
　津守先生の時代の会計研究と今日の会計研究、とりわけそのあり方を比較して、先生の思いは、／先生の「思索の旅」に圧倒されると、なにかスケールの小さい研究、粒の小さな研究者といった思いがしてくる
　→７）の研究方法のＩＳＯ化：「会計史研究の現代的意味」p. 29, 30 の第 4 の問題点が極めて重要な箇所

Ｑ１０（最後，個人的な思い）：**「思索の旅」の行き着く先は（究極の相対化）**：津守先生は自己の相対化を強く強調されておられる→この点で究極の相対化は（生死の問題）→先生の「思索の旅」の埒外とは思えない：思索の旅の終着駅は

田中章義先生インタビュー・メモ

2012/8/9（於東京経済大学）　石川純治

キー：会計客体、会計主体、主体と客体の同一性（主体＝客体)、自己意識、資本の自己意識、会計資本；弁証法と自己意識(と対象意識)、弁証法と構造；内容と形式、本質と現象、形式規定性；統計と会計、認識様式（技術性と社会性)，社会科学としての複式簿記

Ｉ）主体と客体、会計主体について：会計と客体の問題→統一的把握の方法

● ①「会計における主体と客体」(『東京経大学会誌』242 号、2005 年)

馬場の二元的主体構成＝実践的主体（機能資本家、経営者）と論理的主体（客体に内在)：実践的主体の役割が過大に評価、「資本の担い手」の役割の過大評価

→会計主体＝「客体的主体」(客体のもつ主体性）11 頁、会計＝資本の一形態→資本の自己意識（12 頁）

● ②「会計の根底にあるもの」(『東京経大学会誌』250 号、2006 年)

主体と客体（対象の論理）→主体＝客体へ：その同一性（＝）思考を生み出す契機は何だったか(長い思索の時間)、等号＝の意味が重要（「即」）

『資本論』→①資本は貨幣が変化した価値（26 頁)、②資本は有機体（26 頁）

「会計の根源は貨幣(資本)のもつ計算機能にある」(陣内「発刊によせて」のなかで)

自己意識

資本は有機体→会計は資本の１つの形態、姿（28 頁）

主体としての「資本」と主体としての「人間」との関係：「人間の姿をとった資本」(『資本論』第１巻）→構造と主体

物象化：会計「物象化」とそれに付着する観念（30 頁）→その観念について

※余談：対象意識と自己意識、『精神現象学』構成の順番：感覚的確信→知覚→悟性／→理性→宗教→絶対知

悟性までが「対象意識」で「科学の知」（中埜肇『方法論としてのヘーゲル哲学』103 頁）。→となると、科学の知は「知の遍歴」の中継地点。ここからが対象意識→自己意識。

● ③「会計学方法論からみた日本会計学のアイデンティティとその展開」(原稿、2012 年)

田中理論の根幹にある見方・方法：主体即客体、主客不二、資本の自己意識

区別や対立ではなく、「同一性」、「即」、／※「不二」、「一如」(行学一如)、一元的二元論（ベルクソンの心体論、有機体)

資本と会計の同一性（９頁)、「会計資本」説（10 頁)。「同一性」の意味（独語)、一般的な意味での「同一性」で理解できる？「即」も難しい用語、即は同一性とその真意は微妙に違う。an sich und fur sich での「und」問題（即自 und 対自）

→２つの会計学、「方法」としての会計学（個別資本説がその代表）と「現象」としての会計学（上部構造説、公表会計制度論）の「同一性」による統合の方法か

↓

資本の「自己意識」としての会計：資本の形態的多様性

現代会計の主役ともいえる投資家（投資家資本主義）は、ここでの「資本」(企業資本）から

すれば、どういう位置に？（外か内か)。「多様な現象を通じて」（11 頁）ともかかわるー。

「各種の評価基準の併存」（11 頁）という現実←資本の形態的多様性による理解・解釈→「形態的多様性」→変貌する現代会計の説明としては抽象的？

↓

会計は「資本のモメント」（同ページ）→「会計だけをいくら見つめても、会計が何であるかが分からなかった訳」（10 頁）：◎「擬制資本という資本の特殊的形態が、かつての銀行資本のように、いまや資本一般として他の資本を包括し、資本世界の全体を有機的に包括する存在になっている」（13 頁）→「資本」の形態　↓

Ⅲとも密接にかかわる（擬制資本、信用制度、株式会社論）

津守理論に関連して：

資本の自己意識の観点→「計算」と「公開」の関係はどう捉えられるか

※簿記・会計の「総体的」把握（計算と公開の一体性と統合性）のアプローチ

アプローチＡ：計算→公開　who、アプローチＢ：公開→計算　who

アプローチＣ？：始めから一体的把握　　Ｂ→Ａ（公開→計算→公開）も

- ④「会計における内容と形式」、形式→形態か
  経済＝内容、会計＝形式、宮上説と津守説と田中説
  宮上説の検討（⑤「宮上一男氏の会計理論について」第 96 号）の別稿として
  本質と現象（あるいは内容と形式）の正しい関係の理解⑤p.128
  p.151 の表の理解：会計の本質は形式規定性のなかに存在する（p.150 脚注 50）
  ↓
  「会計は土台的要素（内容）と上部構造要素（形式）の統一である」p.152
  →会計の普遍的内容と津守理論の（制度性に対する）「固有性」とのかかわり？

Ⅱ）統計と会計、認識様式、分業、主体―認識様式－社会的意識

統計と簿記・会計：経済・経営活動に必要な計算・記録という認識様式（一般に計算様式）

２つの分業関係と２つの計算様式：会計は直接的分業を基礎、統計は間接的分業を基礎

社会科学としての簿記教育→格好の視点提供

Ⅲ）擬製資本と現代会計、その現代的特性と問題性：私の研究課題の１つ

信用制度と擬制資本と株式会社：川合、生川、深町、飯田、利子・信用理論

金融経済論と現代会計、世界資本主義、金融制度規制、管理通貨制度 etc

現代の資本主義社会に対する深い認識・洞察が必要→現代会計の特性と問題性

Ex.「今日われわれの眼前にあるものはすべて転化した姿」、「転化の本質および過程を明らかにする」（川合、拙著『時価会計の基本問題』290 頁)、「会計現象の（政策的ではなくー引用者）理論的分析は何らかの意味で経済学の理論的作業の一翼を担う」（別府、同拙著 290 頁）

↓

今回の両先生のインタビューの重要テーマ「計算と公開」（or 個別資本説と公表会計制度論）の会計問題とかかわるはず→経済と法と会計（信用制度・擬制資本と株式会社と企業会計）

付記：インタビューの内容のＣＤ

インタビューの内容は学会機関誌『会計理論学会年報』（2013 年９月発刊予定）付録ＣＤとして掲載予定。

津守先生のインタビュー・テープを聞いて

3 月 15 日用のメモ　石川純治

1 日目（7 月 15 日）

Ⅰ　研究前史

1　第 1 期＝「真夏の夜の夢の季節」（1942～1948 年）　～18 歳

p. 4：真夏の夜の夢の季節

pp. 5-6：世界観と方法の関係、帰納主義的発想が強い→津守（会計）理論とのかかわりは

2　第 2 期＝大阪地労委時代（1949～1956 年）　19 歳～26 歳

p. 9：der Keim（芽生え）←自分の方法の基本的部分が出来上がった

p. 10：現場と帳簿の関係→津守理論とのかかわりは

Ⅱ　会計学研究

1　第 1 期＝京都大学大学院修士課程時代（1957～1959 年）　27 歳～29 歳

p. 12：なぜ会計学を選んだか→宮上制度論アプローチ、会計と現場（地労委時代）

p. 14：『配当計算原則の研究』の方法→歴史分析と構造分析、その方法と関わる世界観は？

2　第 2 期＝京都大学大学院博士課程時代（1959～1962 年）　～32 歳

p. 17：シュマーレンバッハ動態論（税務は収支計算、これをベース）→実務の弁護論

pp. 9-10：フィルファーディングの読み方→背景・前提が重要→メタ理論的理解→会計学にも

3　第 3 期＝立命館大学時代前期（1963～1968 年）　～38 歳

4　第 4 期＝立命館大学時代後期（1968～1970 年）　～40 歳

pp. 21-22：取得原価主義、資本剰余金、アメリカの損益計算書

pp. 22-23：アメリカ動態論の経済的基礎→現実性と論理性、※「現実的意義」のタイトル多い

5　第 5 期(1967 年？1970 年～1985 年)　40 歳～55 歳

p. 24：「計算の周りのこと」、「企業会計理論生成の論理」、公表と公開

p. 25：ミル『自由論』に感激→苦しい時期（6 年間）に悟る、先輩の飛行機との関わりで会計をやる→ここは大いに関心のあるところ

p. 26：メトカーフ委員会 *Accounting Establishment*(1700 ページ)の分析→構造分析の手がかり

6　第 6 期(1985 年 9 月～)　55 歳～

pp. 28-29：公開の論理→3 層構造

p. 29：公開の方から＆計算構造の方から→一生の仕事として

p. 30：会計の固有性とは：会計の自分の土俵、会計は人間社会のあり方の根本的なことに関わっている、資本の問題、所有の問題、アナログとデジタル

7　第 7 期(2000 年 2 月～現在)　70 歳～

pp. 32-33：世界観と方法の関係、世界観＝資本論→価値形態論、レーニン『哲学ノート』

p. 34：「観念的」の位置：観念的な生産過程の統制と総括→生産過程の統制と観念的な総括

p. 35：株式会社の問題、社会的資本、機能資本家と所有資本家

石川インタビュー・メモ pp. 1-6

p. 2：制度化された会計理論と固有の会計理論

p. 3：3 次元モデルと「計算」（本丸）へのつながり：Ｑ３の 4 次元モデルへ、

p. 4：歴史と構造と弁証法と計算→Ｑ５が重要

pp. 4-5：会計的権力機構の確立と制度→Ｑ７（森山 pp. 317-320, p. 392 が極めて重要）

２日目（7 月 16 日）20 ページ～

pp. 22-23：公開に「逃避」の真意→どういう段階にきているか、メタ理論

p. 26：相対化→どういう状況の中におかれているのか、会計学者はよく分かる状態にすべき

p. 28：固有の会計理論と計算と「資本論」、複式簿記

p. 29：財務報告(financial reporting)と財務諸表(financial statement)との相違

p. 34：名目勘定の論理がわかれば→資本循環公式（Ｇ－Ｗ－Ｇ’）は不要

p. 38：制度性と固有性→両者の同一性（田中説）

p. 42：岡潔、ブルバキ以前・以後の違い→論理と「情緒」、アダマール『数学的発見の心理』

pp. 44-45：20 世紀初めの反トラスト運動と「公開」；公開の政治経済学、その一環としての会計制度；publicity と disclosure の違い

p. 48：公開の優位性、以前からある、ドイツ的公開（配当政策、財務）、アメリカ的公開、→市場全体における優位性と個別企業における優位性の立て分け

p. 51：外（投資家）からの会計認識の仕方や計算の仕方を規定、※「投資のリスクからの解放」→誰の投資か（その主体は）？

pp. 52-53：メタ理論＝会計理論を位置づけるのに必要な理論、ある理論がどういう状況のなかでできたかを知る

pp. 53-54：価値法則と制度→制度に関係なく経済を規定→価値法則と固有の会計理論

p. 55-56：新自由主義と現代の会計、コーポレートガバナンスの国際化と会計←メタの視点→難しいのは労働の問題（ドイツ）

※ちなみに議論の優先度を付けると：

①インタビュー・メモ１ページの一連のＱ１～Ｑ５、それらを貫くもの→上記の実践枠、外枠（周辺、だが重要）と中心（本丸）との関係と変容

「計算」の内容と私の問題意識：ハイブリッド性の諸相から→フロー計算／ストック計算の関係（連携）とその変容、Ｂ／ＳとＮＩとＣＩ・ＯＣＩ、取引区別の曖昧性 etc.

②「会計的権力機構」（著書第 12 章）のメトカーフ委員会の分析（その政治的背景も知りたいところ）と問題点→その現代的文脈への分析視点、それに伴う学界（アカデミズム）の位置

※参考：拙稿「複式簿記の見方・考え方・教え方（下）」（『駒澤大学経済学論集』第 44 巻第 2 号、2012 年 12 月）→8.2 節（67-69 頁）補論 8（74 頁），補足 2（78 頁）など

2013 年 3 月 15 日　福岡高宮のご自宅にて